

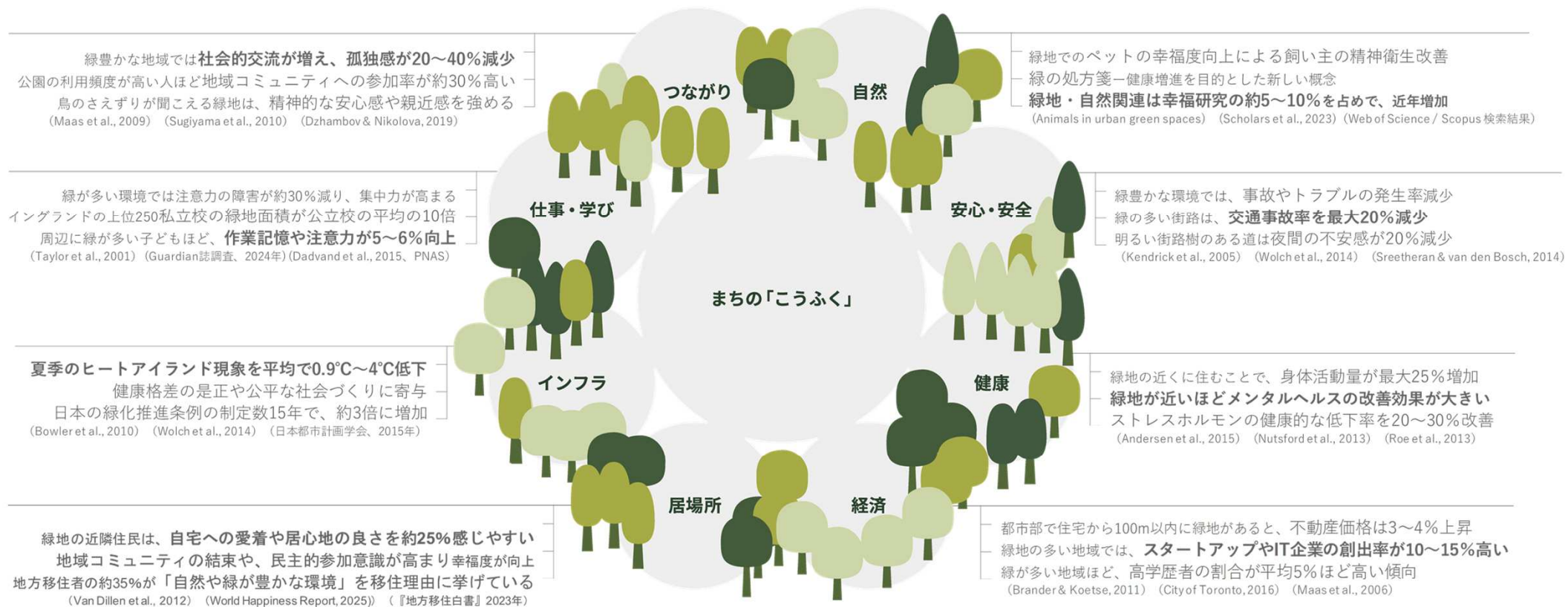


別冊 2：深澤直人氏からの提案（概要）

“こうふくの森”から甲府盆地の緑化を考える

緑を起点としたこうふくの創造

- 甲府市リニアまちづくりデザインディレクター深澤直人氏の提案は、本市のまちづくり戦略を念頭に置きつつ、「**“こうふく”を創造するためにまずは緑を作ることから始めよう**」というメッセージである。
- 様々な研究成果や論文などを基に、「こうふを、こうふくにする」ために、「こうふく」な要素と緑を結び付け、「こうふく」な現象に繋げることを目指す。



※本資料のエビデンスは研究の一部を要約したものであり、前提条件や検証プロセスの記述は省いています

環境問題への具体的行動の必要性

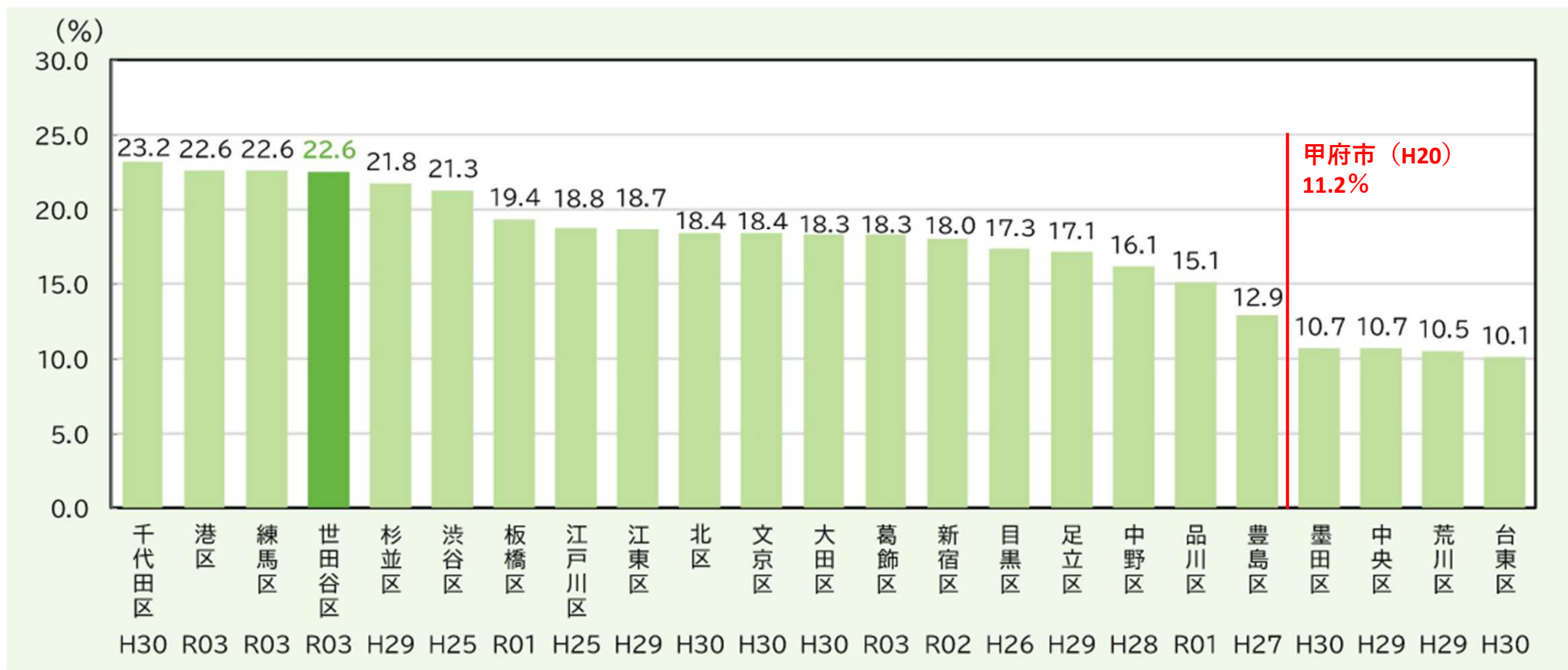
- R7年の本市の猛暑日数は全国で2番目。都市の温暖化対策（ヒートアイランド対策）は、“こうふく”な暮らしを行う上でも重要なテーマであり、現実的な対策が求められる。
- 環境問題は理想論ではなく、現実的な行動が求められる中で、世界の都市はすでに動き始めている。



周囲に緑はあるが、身近な緑が少ない

深澤直人氏提案を
甲府市補足

- 平成20年度のデータによると、本市の市街化区域内的の樹木緑被率は2.3%、農地や水辺を含んだ緑被率は11.2%である。
- 東京23区の緑被率※と比べると、本市の緑被率は下から5番目に位置する。市街化区域内的の農地などが減少しているため、現状はさらに数値が低いと推測される。
- 深澤直人氏は、このような状況が日陰の少なさや住民の散歩の機会の少なさにつながっていると考えている。



●緑被率の定義について

- 東京都においては以下の定義がある。
 - 緑被率：樹林、草地、農地、園地などの緑で覆われている土地の面積が、対象となる地域全体の面積に占める割合
 - みどり率：緑被率に「公園内の緑に覆われていない面積」「河川などの水面の占める割合」を追加した割合

※本市の緑被率（11.2%）には水辺を含んでいる。

※取りまとめ：世田谷区の土地利用2021
※各区の調査年次・調査方法は異なる

リニア駅前エリアでの“こうふくの森”の提案

- 甲府空襲で市街地の約74%が焼失し、その後の戦災復興が経済と暮らしの再建が優先され、緑の整備が後回しになったと考えられる。一方で、明治神宮内苑や広島平和記念公園は、70年から100年以上かけて森を育ててきた。
- 本市も、地球温暖化（ヒートアイランド）対策で、人の命と暮らしを守るための確かな選択肢として、リニア駅前に「**こうふくの森**」を育てていくことから始めたらどうか？



新山梨環状道路上空付近からリニア駅南側エリアを見る

上記は、甲府市リニアまちづくりデザインディレクター深澤直人氏提案のコンセプトイメージです。本市が整備をお約束するものではありません。駅舎を含む各種基盤施設もイメージです。

リニア駅前エリアでの“こうふくの森”の提案

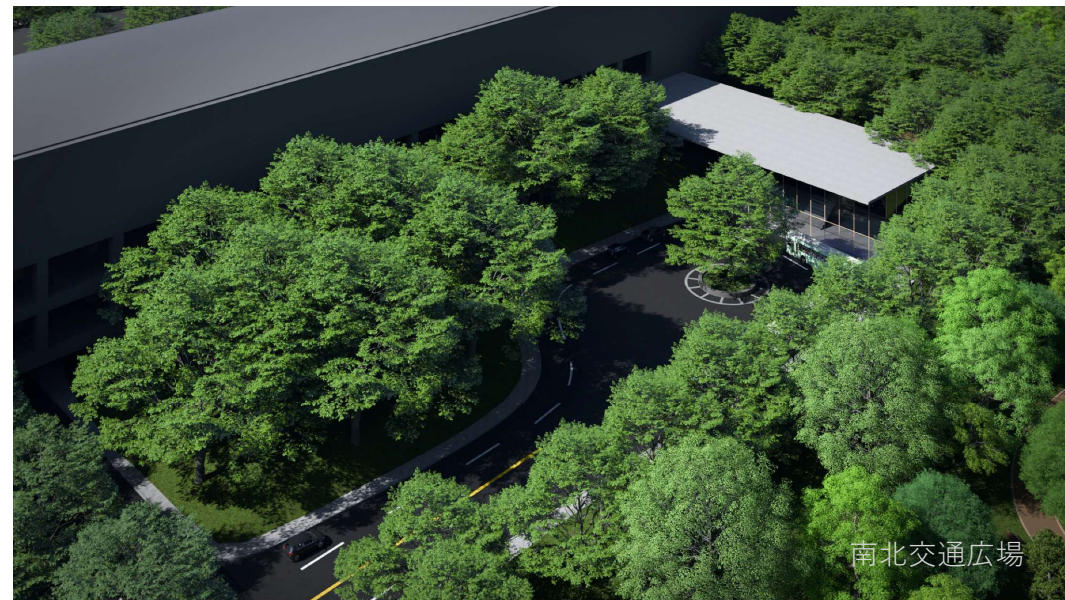
- 提案においては、R7.2月公表の基盤整備方針に示される道路計画や造成・水路の考え方等を基にしている。
- 特に駅南側エリアにおいては、各街区が一体的に利用できるような連携方法や歩行者ネットワークも提案している。



上記は、甲府市リニアまちづくりデザインディレクター深澤直人氏提案のコンセプトイメージです。本市が整備をお約束するものではありません。駅舎を含む各種基盤施設もイメージです。

緑を中心とした多様な“シーン”の創出

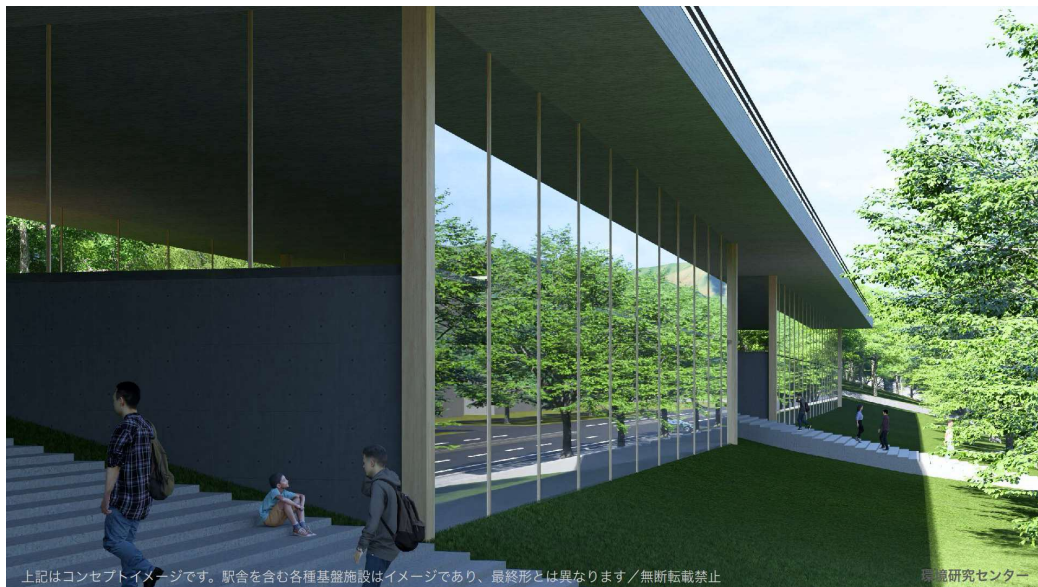
- 緑との多様な関係性（通路、広場、水辺など）をデザインし、ここに人が集い、交流する場となることを目指している。
- なお、本検討は、造成レベルの詳細検討や、緑化方法や植生などの専門分野の技術的検討を行っていないイメージです。



上記は、甲府市リニアまちづくりデザインディレクター深澤直人氏提案のコンセプトイメージです。本市が整備をお約束するものではありません。駅舎を含む各種基盤施設もイメージです。

配置を検討する都市機能（案）

- こうふくの森の中には、最低限の都市機能（森と連動し地球温暖化について知の拠点となる「環境研究センター」や、森に暮らすように滞在可能な宿泊施設など）を配置しており、**その発想は本市のシナリオ1に近い。**



左上：環境研究センター

- こうふくの森にて知が集まり、文化が育つ場となる。その中心拠点が環境研究センターであり、実効性のある地球温暖化対策を検討する場とする。
- 環境研究センターと連携して、駅前の森全体が継続的な観察と実験を行う「生きた研究の場」となる
- 国内外の研究者・学生・専門家が集まりやすい立地（リニア駅前）を活かしシンポジウム、国際会議、研究合宿、視察ツアーなどを定期的に開催。

右上：宿泊施設（ヴィラ）

- リニア駅前の森の中にヴィラを点在させ、「森に暮らすように滞在できる場所」とする。

左下：情報発信施設（インフォメーション）兼 南側交通広場

- 南側交通広場と連動した高質な情報発信施設

上記は、甲府市リニアまちづくりデザインディレクター深澤直人氏提案のコンセプトイメージです。本市が整備をお約束するものではありません。駅舎を含む各種基盤施設もイメージです。

“こうふくの森”の都市デザイン面からの効果

深澤直人氏提案を
甲府市補足

- 甲府盆地の緑化に向けた起点としての“こうふくの森”であるが、都市デザイン（景観）の視点からの効果も担っている。
- 一つは、リニア高架橋の圧迫感軽減の効果、もう一つは、駅南北の一体的な景観形成の効果である。



1) リニア高架橋の圧迫感軽減としての緑

- JR東海の工事説明資料によると、高架橋（ホーム部）は約370mと計画されている。
- ラーメン形式の高架橋の柱が連続することで、特に歩行者からは圧迫感を与える可能性があり、構造は変えられないものの、駅舎の景観事前協議のテーマの一つとなる。
(写真参考：北陸新幹線・敦賀駅舎)
- 「高架橋手前に樹木を連続的に配することで、圧迫感軽減を図れるのではないか」という提案内容である。



(写真：北陸新幹線敦賀駅／本駅と同様、ホーム部が地上20m前後に位置している)

2) 駅南北の一体感創出としての緑

- 今回の深澤氏の提案は本市が事業に関与する「駅南側エリア」を主な対象とするものであるが、リニア駅前エリア全体で考える必要があるという氏の考えより、駅北側部分の提案もいただいた。
- 駅北側は、最も事業進捗が早く一部工事が着工しているスマートICや、県整備予定の北側交通広場やP&R駐車場の設計も進んでいることから、実現に向けては駅南側エリア以上に調整が必要になる。
- しかし、本市の基盤整備方針で示した「事業主体の違いを意識させない一体的な都市空間の形成」の実現方法の一つであるとともに、同方針でも示した「グリーンインフラ」の実現にもつながる。

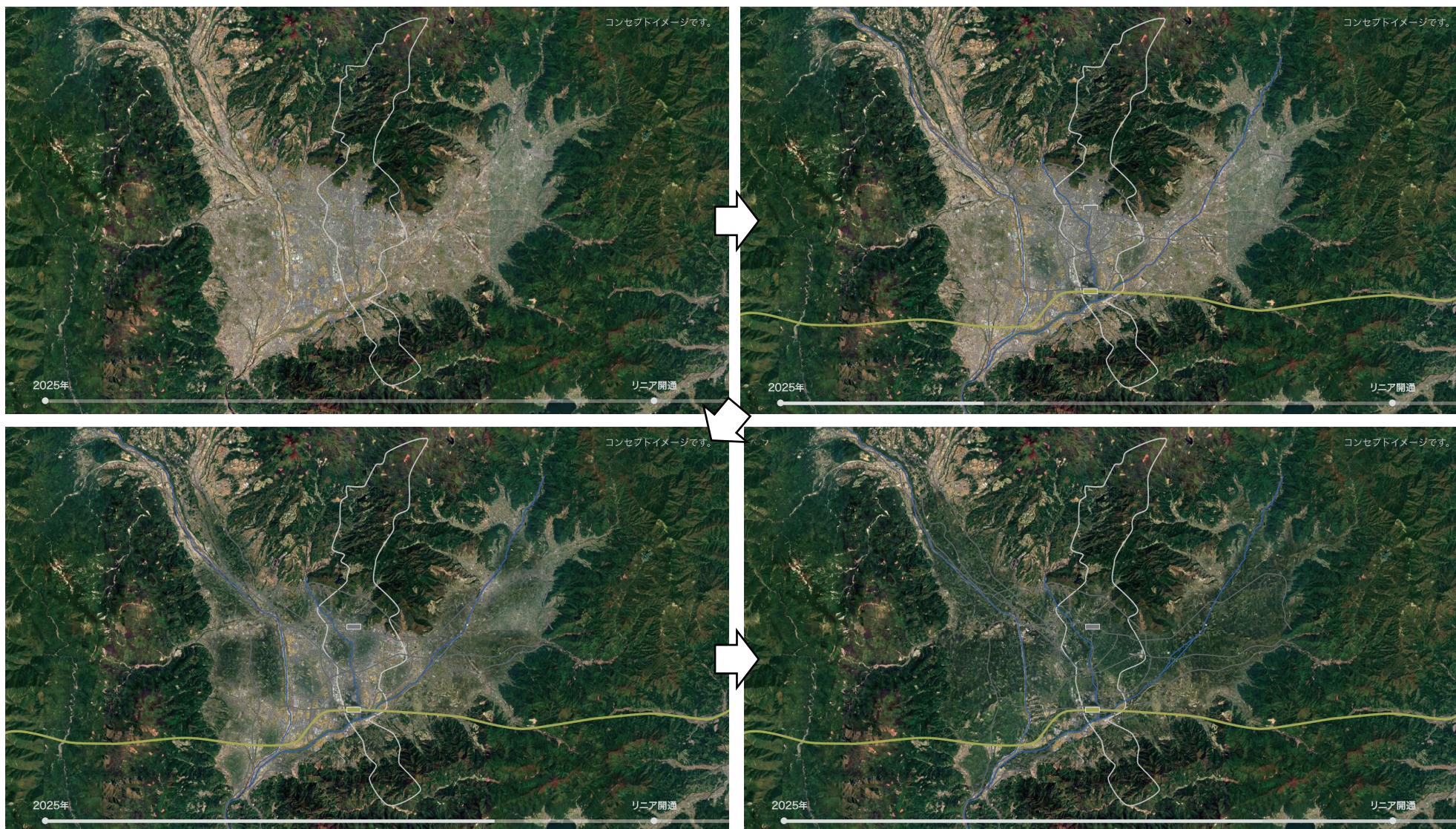


上記は、甲府市リニアまちづくりデザインディレクター深澤直人氏提案のコンセプトイメージです。本市が整備をお約束するものではありません。駅舎を含む各種基盤施設もイメージです。

“こうふくの森”から甲府盆地の緑化へ

- 深澤直人氏は、本市だけでなく山梨県全体で考える必要性を唱い、これを「**山梨桃源郷ユートピア構想（仮）**」と称する。
- 県は、R8年度より、リニア駅を起点に、甲府盆地さらには県土全体を長期的に緑化していくための指針として、「**山梨緑化100年構想**」の検討に着手するとしている。

リニア駅を起点に、甲府盆地の緑化が進むイメージ



上記は、甲府市リニアまちづくりデザインディレクターの深澤直人氏提案のコンセプトイメージです。本市が整備をお約束するものではありません。駅舎を含む各種基盤施設もイメージです。